

特集

ブナ林の保護・保全と持続可能な利用を通じた山間地域の未来を考える

只見町から発信「全国ブナ林フォーラム」

10月20～22日までの3日間、ブナ林の保護・保全と持続可能な利用を考える「全国ブナ林フォーラム」が只見町で盛大に開催され、全国から多くの方々に参加しました。

21日に季の郷湯ら里で開催されたフォーラムには、ブナ林を有する全国の自治体、住民団体が集い、ブナ林との共生や活用の取り組みに関する発表や提案がなされました。その前後日には、町内の観察の森で「ブナ林観察会」が行われ、只見町の自然環境について知識を深めました。

本号では、この「全国ブナ林フォーラム」について詳しくご紹介いたします。

― 全国フォーラム開催の

背景と目的 ―

この「全国ブナ林フォーラム」は、只見町と全国ブナ林フォーラム町民実行委員会の主催で、只見町の「自然首都・只見」宣言10周年を記念し、日本各地でブナ林の保護・保全とその持続可能な利活用を進める団体、個人を招いて、活動報告と意見交換、相互交流を図り、今後の在り方について検討していくために企画されました。

只見町は、「ブナと生きるまち 雪と暮らすまち 奥会津只見の挑戦 真の地域価値観の創造」を理念に、都市型生活・文化に追随する



この自然を
活かし守る。

次世代へ引き継ぐ
「自然首都・只見」宣言

▲10月22日に梁取の観察の森で開催されたブナ林観察会

ことなく、地域の伝統的な生活文化を抛り所に、独自の地域発展を目指す町づくりを進めてきました。

2007（平成19）年には、日本の自然の中心地である「自然首都・只見」宣言を行い、さらに2014（平成26）年にユネスコエコパークの登録を実現してきました。

登録後は、「只見ユネスコエコパーク」として、ブナ林などの自然環境や生物多様性を保護・保全しつつ、地域資源と伝統技術を活かした持続可能な地域の発展を目指した町づくりに取り組んでいます。

こうした山間地が取り組む地域振興のモデル地域として、今回「全国ブナ林フォーラム」を開催し、自然環境などの保護・保全と持続可能な利活用に向け、全国の方々と考える場を設けました。

全国ブナ林フォーラム

ブナ林の保護・保全と持続可能な利用を目指して



▲ブナ林の保護・保全と持続可能な利活用について討論したパネルディスカッション



▲報告に耳を傾ける来場者の皆さん



▲約 200 名が来場した全国ブナ林フォーラム

只見町から発信

全国ブナ林フォーラム

ブナ林の保護・保全と持続可能な利用をテーマに開催された「全国ブナ林フォーラム」には、全国から約200名が参加しました。

開会にあたり、菅家町長は「全国のブナ林を抱える地域が一堂に会し、ブナ林の保護・保全と持続可能な活用を議論することで、地域の問題を解決する糸口になることを期待したい。そして、ブナ林と地域社会の将来を共に考え、その重要性をこの『自然首都・只見』から全国に発信していきたい」とあいさつし、環境省東北地方環境事務所の小沢晴司所長が祝辞を述べられました。

第1部では、新潟大学の紙谷智彦名誉教授による国内基調報告が行われ、新潟県魚沼市内で取り組む、ブナの利活用の実践研究（下記参照）などについて紹介されました。

第2部では、只見町を含む、

- 国内基調報告 -



新潟大学名誉教授
紙谷 智彦 氏

「旧薪炭林で育ってきた
ブナを活かす」

～原生林構造の復元も
めざすブナ林業の取組み～

私は1980年代に薪炭林として利用されてきたブナなどの広葉樹が伐採後に自然再生する仕組みについて研究をしていました。当時の豪雪山間地は、半世紀前まで民有の広葉樹林が薪炭林として都市の家庭用エネルギーを支えていましたが、時代の流れとともに薪炭林としての利用はなくなり、多くのブナ林が放置されています。豪雪地だからこそ豪雪に耐えて成長するブナを林業樹種として活かすことができれば、集落の維持や地域経済に貢献できる可能性もあります。そこで、平成27年から新潟県魚沼市の委託を受け、大白川区で旧薪炭ブナ林を調査してきました。その間、数回

国内報告者

北海道



黒松内町
ブナセンター
学芸員
齋藤 均 氏
「北限のブナ林」

岩手県



花巻のブナ原生林に
守られる市民の会
事務局長
望月 達也 氏
「花巻のブナ原生林に
守られる市民の会」

長野県



いいやま
ブナの森倶楽部
会長
渡辺 隆一 氏
「北信濃におけるブナ
林の保護と活用」

徳島県



一般社団法人
かみかつ里山倶楽部
事務局長補佐
原田 寿賀子 氏
「ブナ林再生—徳島県立
高丸山千年の森」

宮崎県



綾町役場
照葉樹林文化推進
専門監
河野 耕三 氏
「九州のブナ林移行帯
付近の自然と生活」

福島県



只見町役場
地域創生課
ユネスコエコパーク推進係
中野 陽介 氏
「只見地域における
ブナ林と住民の関わり」



▲パネルディスカッションの司会を務めた
只見ユネスコエコパーク推進専門監の
鈴木和次郎氏

北は北海道黒松内町から南は宮崎県綾町まで、全国6カ所の自治体、住民団体の代表が、ブナ林の再生プロジェクトや持続可能な活用について、各地の取り組みなどを発表しました。只見町からは、只見町役場地域創生課の中野陽介副主査が、只見地域におけるブナ林と住民の関わりについて紹介し、「高度経済成長期を経る中で、地域住民とブナ林を含む自然との関係が変化しました。しかし将来を考えると、自然の恵みを受けながら生活してきたこれまでのように、今後とも豪雪とブナ林に代表される豊かな自然環境を抛り所に、共に生きていくことが重要」と述べ、これからのブナ林をはじめとする地域資源を活用した新たな取り組みについても提案しました。

第3部のアトラクションでは、明和小学校5年生による只見町の伝統芸能「小林早乙女踊り」が発表されました。児童たちは唄や太鼓、田

の試験伐採を行い、今年からブナを用材として活用しながら、かつての原生林の林相へ戻す新たな施策を始めています。区画単位でブナを伐採すると、ブナ林の中に異なる樹齢の集団がモザイク模様のように存在することになります。長期的にブナ林を活用し続けられ、いずれは原生林のような林相に誘導することができず。旧薪炭ブナ林を用材材林として活用しながら、かつての原生林に似た森林環境に戻せる可能性があるので。伐採したブナ材の利活用をはかるために、民間の有志とともにスノーピーチ【雪国のブナ】という活動も行っています。山間地域がブナ林と共に将来的な維持・発展を目指すには、自然資源と地域住民との関係を断ち切るようなブナ林の保護・保全ではなく、ブナ林を守りつつも、持続可能な利活用を通してブナ林と人とが共に生きる視点が重要です。そのことが、ブナ林の保護であり、ブナ林に根差した地域の生活と文化を守ることなのです。



▲アトラクションで、只見町の伝統芸能「小林早乙女踊り」を披露した明和小学校 5 年生の皆さん



▲ブナの種子を集めるシートトラップなどを見学した樺戸観察の森



▲梁取の成法寺など町内の名所を見学した参加者の皆さん



▲梁取の観察の森を散策する参加者の皆さん

植えの様子などを表現した舞いを披露し、来場者を魅了しました。

第4部のパネルディスカッションでは、只見ユネスコエコパーク推進専門監の鈴木和次郎氏を司会に、報告者7名が「ブナ林の保護・保全と持続可能な利用」をテーマに討論を繰り広げました。討論では、「緑の回廊の整備がブナ林の保護につながる」との意見や、「観光客の受け入れによる自然環境のオーバーユースが課題。利用者を増やすことも大切だが同時にオーバーユース対策も必要」とのブナ林の活用への課題があげられました。最後に司会の鈴木氏が「山間地域の課題は高齢化。ブナ林の持続可能な利用で地域経済につなげていくことが重要である」とし、今回の討論であげられた課題について、「継続して議論を深める必要がある」と述べられました。

第5部では、「全国ブナ林フォーラム宣言」および「『自

「全国ブナ林フォーラム只見宣言(要旨)」



長野県
いいやまブナの森
倶楽部
会長
渡辺 隆一 氏

山間地域がブナ林と共に将来的な維持・発展を目指すには、自然資源と地域住民との関係を断ち切るようなブナ林の保護・保全ではなく、ブナ林を守りつつも、持続可能な利活用を通してブナ林と人々が共に生きる視点が重要です。そのことが、ブナ林の保護であり、ブナ林に根差した地域の生活と文化を守ることです。今まさにそうした取り組みに立ち上がるべき時と言えます。

守るべきところは守り、活用できるところは活用するのは当然ですが、守ることは一切手を付けないことを意味しませんし、活用する場合にも、将来世代への資源の持続性と自然環境、生物多様性への影響を考慮しなければなりません。そのこと

が、地域の自然と人間との共生、生活の持続性を確保する唯一の道です。

全国のブナ林を抱える地域社会、保護・保全に取り組む諸団体・個人がネットワークで結ばれ、情報を交換・共有し、活動で交流し、共にブナ林の保護・保全と地域住民の持続的な資源利用を図るため、活動を推し進める必要があります。ブナ林は、そこに生活する住民にとっての生活基盤であるばかりではなく、人類共通の財産です。私たちは、今回、福島県只見町で開催された全国ブナ林フォーラムを契機として、互いに連携し、「ブナ林を守り、育て、活用し、地域社会を守り、発展させる運動」に共に取り組むことを宣言します。

「自然首都・只見2018年宣言(要旨)」

2007年の「自然首都・只見」宣言は、只見町の自然を尊び、感謝するとともに、それを守り、次世代へと引き継ぐ決意表明でした。

この10年間、宣言を礎に、都市部の価値観に追随せず、この地域の自然環境と生物多様性を守りながら、伝統文化と革新性の独自の融合・発展を目指すことこそ、唯一、地域社会が生き残る道であると確信することができました。

将来の只見町の維持・発展を実現するため、今後も「自然首都・只見」宣言を確実に引き継ぎ、過疎と高齢化という大きな課題はあるものの、独自の地域価値観と確固として自立した地域

社会を築く姿勢が私たち町民には求められています。そして、ここに暮らす私たち一人一人が地域の自然の守り手として、また、伝統的な生活・文化の継承者あるいは地域振興の担い手として着実に取り組み続けていくことも重要です。

「自然首都・只見」宣言10年を契機に開かれた全国ブナ林フォーラム開催にあたり、ここに集う只見町民、そして只見町を応援してくださっている町外者の方々の総意の下、改めて、「自然首都・只見」宣言の意義を確認し、その実現を図るための決意と覚悟をもって「自然首都・只見」の新たな10年に踏み出すことを宣言します。



只見町役場
地域創生課
主事補
斉藤 咲子 氏

然首都・只見」2018年宣言」が行われました。「全国ブナ林フォーラム宣言」は、長野県のいいやまブナの森倶楽部の渡辺隆一会長が「ブナ林を守り、育て、活用し、地域社会を守り、発展させる運動」に共に取り組む」と宣言し、「『自然首都・只見』2018年宣言」は、只見町職員の斉藤咲子主事補が「ここに暮らす私たち一人一人が、地域の自然の守り手として、伝統的な生活・文化の継承者として、地域振興の担い手として、新たな10年に踏み出します」と宣言しました。両宣言は会場の大きな拍手によって採択されました。

このように、全国ブナ林フォーラムでは、これからのブナ林の在り方について考えを共有し、自然豊かな只見のフィールドでブナ林の重要性を学び、「自然首都・只見」からブナ林の保護・保全と持続可能な利用の必要性を全国に発信しました。